

---

# 遊戯王GX 奇跡の軌跡

セバス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX 奇跡の軌跡

### 【Zマーク】

Z7325Y

### 【作者名】

セバス

### 【あらすじ】

普通の日常を過ごしていた高校生の少年と少女が、遊戯王の世界を救う為に原作を堪能しながら未知の敵と戦う物語。

ご都合主義どんとこいな作品です。苦手な方はご注意を。

## 「これが運命の出会い」と「ひきつか

「完全に遅刻じゃねえか！ 早く出て来いよ、由梨ー。」

「じめん、お待たせー。」

「よし、忘れ物は無いな？ 走るぞー。」

「うんー。」

俺は赤崎響弥。あかさき きょうじゅ一昨日に高校三年生になつた。

そして今日から普通授業つていう田て、遅刻する時間にも関わらず、俺は自分の家の近くを全力疾走していた。

「つたく、お前に買つてやつた田覚まし時計、前での何個目なんだつけな？」

「つづく、じめんね響弥。寝起きは力の加減が出来なくてさ……」

原因は俺の後ろを走つている、鹿野川由梨かののかわ ゆりである。しつかり者だが馬鹿力で寝起きがメチャクチヤ悪い、赤い瞳と肩の辺りまで伸びた白髪がトレードマーク。俺の幼馴染みだ。

今日も、寝ぼけて目覚まし時計を思いつきり叩いて粉碎してしまつた所為で寝過ごした、という普通の人ならまず起きる」とは無い事件で寝過ごした強者である。

「あとひよつとだな。まだ走れるか？」

「うふー……あつ、ちょっと待つで！」

学校まであと少しどこった所で、由梨が何かを見つけたのか、急に足を止めた。俺もつられて立ち止った。

「おー、どうしたんだ？」

「あつちから声が聞こえたんだ。行ってみよつよー。」

「あつ、待てよー。」

由梨が走つていった後を俺もついて行く。

由梨は何か気になることがあると、他のことが見えなくなる癖がある。それをサポートするのが、小さい頃からの俺の役目だった。「うー」だつたと思つんだけど……

「特に何も無いな」

俺達がたどり着いた場所には、声が聞こえてきそつな物はなかつた。由梨はがつくりと肩を落としている。

「あれ、気のせいだつたのかな？ 確かに聞こえたんだけど……」

「ははは。まあ仕方ないな。そんなに頻繁に変わつたことがあつたら身が持たないし」

「うーん……」

「さうと。もう完璧に遅刻だし、のんびり学校に向かうとこよう  
ん？」

「どうかしたの？」

誰かの捨てたカードか。全く、いらないカードなんて無いんだぞ  
？カードが可哀相じやねえか。

「《サイ・ガール》か。こいつだつて使えるのにな」

「あ、サイ・ガールだ。可愛いな」

『ふはあー。やつとで来られましたよ～』

「「...?」」

待て待て！カードからなんか出たぞ！なに？オカルト？オカルト  
なのか？

『むうつ、失礼な。私はサイ・ガール。カードの精霊ですよ！』

「カードの精霊？アニメなら見たことはあるが.....。それを信じる  
と？」

『信じて貰えないかもせんが、話だけは聞いて貰いたいんで  
す。駄目でしょうか？』

ふ～ん、どうするかね？もう遅刻は確定だしな。聞くだけならタ  
ダだらうし、別にいいよな。

「いいぞ。話は聞いてやる

『本当にですか？ありがとうございますー。』

サイ・ガールの話を簡潔にまとめる。

遊戯王の世界のパラレルワールドに、歴史を破壊する謎の集団が現れたらしい。

パラレルワールドの世界の歴史が変わると原作の世界にも影響があるから、原作を知るこの世界の住人にも力を貸して欲しい、とのこと。

因みに、俺達イレギュラーが介入することに関しては、特に支障は無いらしい。パラレルワールドなだけあって、多少の無茶は利くそうだ。世界を破壊されでは終わりらしいのだが。

「どうでしょー？お力を貸して貰えませんか？」

正直、サイ・ガールの話を一割程も理解できていない。誰だって漫画のようなことを現実で言われたら、信じられないだろう。

でも、こんな状況に憧れなかつた、と言うと嘘になる。俺も由梨も、遊戯王はDM時代からずっと見ていたし、勿論OCGもやってる。プロの決闘者になれたら、なんて話もよくやつてた。

願つてもないチャンスだ。アニメの世界に行つた、なんて言つても誰も信じないだろう。だが変わり映えしない高校生活よりは、退屈しないで済みそうだ。由梨も同じ考えみたいだな。

「いいぞ、引き受けやる

『ほ、本当にですかー？』

「ああ。そんなこと聞かされたら、黙つてられないからな」

「私達にできることがあれば、なんでも言つて。できるかぎりで力になるよ」

『あ、ありがとうございます…』

「なつ…?」

その目に涙を浮かべながら、サイ・ガールが俺に抱きついてきた。しかも、実体化しながら。

「よかつたあ……よかつたですう……」

「ち、ちよつと… なんで響弥に抱きついてるの…? 韶弥もなんで抱き止めるの…? そ、そこは私が……」

美雪が顔を真っ赤にしながら抗議してくる。後半は小声になつて、何を言つているのか聞き取れなかつたが。

そんなこともありつつ、俺達はイリカ（サイ・ガールにこう呼べと言われた）から詳しい話を聞いた。因みにイリカは精霊状態に戻つている。

「なるほど。俺達が行くのはGXの世界で、むじつの世界は基本原作準拠、と

『はい。そしてもう一つ。向こうではどんなことが起こるか分かりません。なので、響弥さんと由梨さんにはボーナスが出ます』

「ボーナス？ もしかして、お金？」

イリカの言葉に首を傾げる由梨。金は金で貰えれば嬉しいけどな。『違いますよ。特別な力を一人につき一つまで授けることが出来るんです。』

「特別な力？」

『具体的にいえば、『幻想殺し』や『一方通行』みたいな能力です。自分で好きな能力を作ることも可能ですよ』

由梨に見せられていた一次創作とかでよくある、転生特典みたいなものか。何故例えのチョイスが無能力者と超能力者の能力からなのかは疑問だが。

まあ、能力についてはゆっくりと考えればいいよな。まだ時間はあるだろうし。

「で、俺達はGXの世界のどこのいつに行くんだ？」

俺は気になつたことをイリカに聞いた。原作が始まる何年も前に飛ばされたら困るしな。

『そついえば言つてませんでしたね。場所は海馬ランドの近くの一軒家。時間は入学試験の筆記の一週間前です』

筆記試験の一週間前か。一週間あればなんとかなりそうだな。『ち、ちよつと待つて！ それじゃ私達、同じ家に寝泊まりするの！』

？」

『へ？ まあ…… そうなりますね。でも何年も一緒に住む駄じゃありませんし、別にいいじゃ無いですか』

「さ、響弥と、同じ家で…… つまりつまり、これって……」

顔を真っ赤にしながら悶える由梨。何を言つてこいるのかはやはり分からぬ。

由梨が復活するまで待つこと数分。

由梨はまだ顔が赤いものの、話ができるへりには復活した。

『さて、これで説明は以上です。何か他に質問はありますか？』

「いや、特に無い」

「私も無いよ

『それではそろそろ行きましょうか。セーのつー。』

そう言つて杖を振ると、持つていた杖から光が放たれた。

「え、ちょっと

俺はそこまで言つて、意識が遠くなつた。

自分の魂は大切にすべし（前書き）

第2話です。デュエルアカデミアでの実技試験です。

## 自分の魂は大切にすべし

俺達がGXの世界に来てから1ヶ月が経過した。

筆記試験は一週間の勉強でどうにかなつたりした。結果は俺が二位。由梨は一位のBという順位だった。由梨に負けたのは悔しいが、目標だった十位以内には入れたし、とりあえず満足だ。

因みに、この世界に来てからイリカから新しいことをいろいろと聞いた。

驚いたのは、この世界には既にサイキック族やシンクロ、エクシーズなどの概念が存在したことだ。なんでもペガサスが数年に電撃発表したといふことらしい。

とは言つても、まだ一部のプロ決闘者にしか普及はしていないらしい。テレビで見た試合で『フレムベル・ウルキサス』を出した瞬間は、観客が祭りのような盛り上がりだつたな。「響弥、そろそろ行こうよ。早くしないと遅れちゃうよ」

「もうそんな時間か。よし、行くか！」

すでに家の前に居る由梨の催促を受け、俺は荷物を確認して家を出る。

ここで負けちゃ意味がない。気を引き締めていかないとな。

俺達が会場に入るときには、もう実技試験は始まつていた。今はまだ百番台のデュエルか。かなり時間はあるな。適当に席を見つけて座る。由梨も隣に座つてゐる。

暇だ。

それから暫く他の受験生のデュエルを見ていたのだが、六十人以上もデュエルを見ていると流石に飽きた。俺はデュエルは見るよりやる方が好きだし。

由梨は隣で爆睡してゐし、話は出来そつて無いな。暇つぶしに小説でも読むとするか。

『受験番号一一番、赤崎響弥君。試験を始めます。四番のフィールドに来て下さい』

小説を読み始めて一時間。ようやく俺の番号が呼ばれた。デュエルディスクにセットしたデッキを確認する。

元の世界から愛用し続けているデッキ。俺が一番信頼しているデッキが、確かにデュエルディスクにセットされている。根拠は無いが、負ける気がしないな。

「んじゃ。行つてくるぞ、由梨」

「ふえつ！？ え、えつとお……頑張つて？」

「何故疑問系だ。一番が呼ばれたんだ。一番も準備しておけよ」

「ひ、うん。ありがと」

由梨を起こしてからフィールドへと向かう。べ、別に由梨が寝過ごすんじゃないかつて心配だつた訳じゃないんだからね！

「君が赤崎君だね。デュエルの勝敗が合否を決める訳じゃない。気

を楽にしてかかつて来てくれ

そう言つてデュエルディスクを構えるリーゼントにサングラス、  
所謂モブ教師。

「分かりました。全力でいきますよ」

俺もデュエルディスクを構える。実はデュエルディスクを使うデュエルに慣れている訳では無いので、デュエルディスクでのデュエルに少し緊張している。

「いぐぞー！」

「はい！」

「「デュエル！」」

響弥

LP / 4000

手札 / 5

試験官

LP / 4000

手札 / 5

「私の先攻だ。ドロー！」

あ、迷い無く先攻取りに行つた。受験生に先攻を譲る、なんて考

えないのかな？

「私は、『アクア・マドール』を守備表示で召喚!」

アクア・マドール

星4／水属性／魔法使い族／攻1200／守2000

アクア・マドールが。個人的には小さな頃から好きなモンスターだな、理由は特に無かつたけど。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ

試験官

LP／4000

手札／3

「俺のターン、ドロー!」

よし、どうにか出来る手札ではある。出し惜しみは無しだよな。

「俺は『サイコ・ウォールド』を召喚!」

サイコ・ウォールド

星4／地属性／サイキック族／攻1900／守1500

「むう、サイキック族か。珍しい『テッキ』を使うんだな『珍しい』ですか。まあ、周りには使っている人は居ませんでしたね

俺の出したモンスターを見て驚く試験官。

確かに珍しいとは思つ。元の世界にはサイキック族で統一したデッキをした奴はそつそつ見なかつた。こつちに来てからはライフコストが重いという理由でさらに敬遠されがちな種族になつた。だが、俺は自分の魂を曲げる気は無い。こいつらと共に戦つていく。

「さりに俺は速攻魔法《緊急テレポート》を発動！ デッキまたは手札から、レベル3以下のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する。デッキから《サイコ・コマンダー》を特殊召喚！」

サイコ・コマンダー

星3／地属性／サイキック族／攻1400／守800

「さて、バトルです。サイコ・ウォールドでアクア・マドールを攻撃します！」

「なに！？ こちらの方が守備力は高いのだぞ！」

あれ、サイコ・コマンダーの効果は知らないのか？ 教師なんだから、押さえておこうぜ？

「ダメージステップに、サイコ・コマンダーの効果を発動。サイキック族モンスターがバトルを行うダメージステップに一度だけ、100の倍数のライフポイントを支払うことで、エンドフェイズまで戦闘を行う相手モンスター1体の攻撃力・守備力を支払つた数値分ダウンさせる。俺はライフを200ポイント払い、アクア・マドールの攻守を200ポイントダウンさせる。サイコ・ショックダウン！」

響弥

LP / 40000 3800

アクア・マドール

DEF / 2000 1800

「くつ、アクア・マドールの守備力が、サイコ・ウォールドの攻撃力を下回った。ライフを払って効果を使う。なるほど、面白い効果だな」

「まあ、これがサイキック族の特徴ですよ」

かなりの数のサイキック族が持つ、ライフポイントを払って効果を発動する効果。これがこの世界で敬遠される理由だ。初期ライフポイントが4000しか無いこの世界では、元の世界と同じ数値のライフコストを払ってもその重さが違う。そのコストの重さとシンクロモンスターの普及率の低さから、この世界ではクレボンスやサイコ・コマンダーといった有能なチューナーまで“使えないカード”と呼ばれている。払ったライフを回復する手段を確保するくらいならモンスターを入れて殴る。それがこの世界、ビートダウン至上主義者がかなりの割合を占める世界の特徴だ。

まあ、俺はさっきも地の文で言った通りサイキックデッキは潰さない。違うデッキを使う時もあるだろうが、俺の魂はこのデッキと共に有るからな。

「続けて、サイコ・コマンダーでダイレクトアタック！」

「ぐあああー」

試験官

LP 4000 2600

伏せカードの発動は無し、か。戦闘で使うカードでは無いのか？

「メインフェイズ2に移行します。先生、シンクロ召喚は知つてますよね？」

「ん？ ああ。チューナーモンスターと、チューナー以外のモンスターを素材として墓地に送り、そのモンスターのレベルの合計と、同じレベルを持つシンクロモンスターを融合デッキから特殊召喚する召喚方法のことだろ？ それがどうかしたのか？」

「ええ。それを今からやろうと思いまして」

俺が放つた言葉に、試験官のみならず観客も騒然としている。

「サイコ・コマンダーはチューナーなんですよ。つまり、条件は満たしています。いきますよ、レベル4のサイコ・ウォールドに、レベル3のサイコ・コマンダーをチューニング！」

サイコ・コマンダーが飛び上がり、3つの緑色の輪へと変わる。その輪の中にサイコ・ウォールドが飛び込み、そのレベルである4つの星になつた。

「生み出されし超常の力を持つ者よ。眠りし仲間の思いを、我が身体に還元せよ！  
シンクロ召喚！」

誕生せよ、《サイコ・ヘルストランサー》！」

サイコ・ヘルストランサー

星7／地属性／岩石族／攻2400／守2000

サイコ・ヘルストラーンサーを召喚した瞬間、会場が静まり返った。そして、誰からともなく割れんばかりの歓声に包まれた。

「こ、これがシンクロ召喚か。間近で見るのは初めてだ。こんなに興奮するデュエルは久しぶりだよ」

試験官も驚いたあとに、俺に言葉をかけてきた。

「お気に召したようでなによりですよ。ではデュエルの続きです。サイコ・ヘルストラーンサーの効果発動。1ターンに1度、墓地のサイクリック族モンスター1体をゲームから除外して、自分のライフを1200ポイント回復する。サイコ・コマンダーを除外し、ライフを回復します」

響弥

L P 3 8 0 0 5 0 0 0

よし、このターンに出来ることはこれくらいかな。問題は次の相手ターンだけど、手札にはどうにか出来るカードがある。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドです」

響弥

L P 5 0 0 0

手札 2

「私のターン、ドロー！」

試験官がドローしたカードを見て一ヤリと笑つた。良いカードを引いたのか？

「リバースカード《強欲な壺》。『ツキからカードを2枚ドローする。』

強欲キター！ フレクションのカードの中を探したけど、強欲な壺も天使の施しも無かつたんだよなあ、ちくしょう。てか何故強欲を伏せた。ブラフにしては勿体無いな。

「《岩石の巨兵》を守備表示で召喚。そして魔法カード《二重召喚》を発動する」

岩石の巨兵

星3／地属性／岩石族／攻1300／守2000

一重召喚か。デュアルを組んでた時にはよく使つたな。作った頃は、血の代償が手に入らなかつたのさ！

「君なら説明は要らないだらう。私は岩石の巨兵を生け贋に、《千年の盾》を守備表示で召喚！」

千年の盾

星5／地属性／戦士族／攻0／守3000

千年の盾……。

なるほど、試験官の『ツキはバー』の守備モンスターを並べるツキか。

「さらに、ツーマンセルバトル永遠魔法を発動！ 各プレイヤーは自分のエンドフェイ

ズに一度だけ、レベル4の通常モンスター1体を手札から特殊召喚できる。魔法カード《死者蘇生》を発動！ 墓地の《岩石の巨兵》を守備表示で特殊召喚！

「私はこれでターンエンド。エンドフェイズにツーマンセルバトルの効果で、手札から《バトルフットボーラー》を守備表示で特殊召喚する」

バトルフットボーラー

星4／炎属性／機械族／攻1000／守2000

試験官

LP／2600

手札／0

はてさて、あの戦士族にはどうやっても見えない盾をどう攻略するかな。もうこのデュエルでシンクロはする気は無いし、デッキの中だけでどうにかするしか無い。

「俺のターン、ドローー」

来たか。これで見えたぜ、勝ちへの道が！

「魔法カード《最古式念導》を発動！ 自分フィールドにサイキック族モンスターが表側表示で存在するとき、フィールド上のカード1枚を破壊し、1000ポイントのダメージを受ける！ 俺は、千年の盾を選択！」

「くつ、自分へのダメージと引き換えに……！」

響  
弥

LP / 50000 40000

「魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地からサイコ・ウォールドを復活させる！ そして、サイコ・ウォールドの効果発動！ 800ポイントライフを払うことで自分フィールドサイキック族モンスター1体の2回攻撃を可能にする！ ただしこの効果を発動するターン、このモンスターは攻撃できない。ライフを800払い、サイコ・ヘルストラーンサーの2回攻撃を可能にする」

響  
弥

LP / 40000 3200

「さらに、サイコ・ウォールドを生け贋に捧げ、『マックス・テレポーター』を召喚！」

マックス・テレポーター

星6／光属性／サイキック族／攻2100／守1200

「マックス・テレポーターの効果発動！ ライフを20000ポイント払うことで、デッキからレベル3のサイキック族モンスター2体を特殊召喚する！ 現れる、チヨーナーモンスター『メンタルシー  
カー』、『メンタルプロテクター』！」

響  
弥

LP / 32000 1200

メンタルシーカー

星3／地属性／サイキック族／攻800／守600

メンタルプロテクター

星3／光属性／サイキック族／攻0／守2200

「チューナー……まさか！」

「そう、そのまさかですよ！ レベル3のメンタルプロテクターに、レベル3のメンタルシーカーをチューニング！

超常なる力を持つ悪魔よ、敵の手の内をその魔眼に映し、己が力へ換えよ！ シンクロ召喚！ 現れる、《サイコ・デビル》！」

サイコ・デビル

星6／風属性／サイキック族／攻2400／守1800

本日2回目のシンクロ召喚。さつきよりも観客が騒がしくなったな。試験官も唖然としてるし。でもまあ、止まる気は無いけど。

「まだいきますよ。サイコ・ヘルストラーンサーの効果発動！ サイコ・ウォールドを除外し、ライフを1200ポイント回復する！」

響弥

LP／1200 2400

「さらに、永続トラップ《ブレイン・ハザード》を発動！ 自分の除外されているサイキック族モンスター1体を選択し、自分フィールドに特殊召喚する！ 来い、サイコ・ウォールド！」

3回目の登場、サイコ・ウォールドさん。どこか疲れてるよう見えるのは気の所為か？

「なるほど、その為にサイコ・ヘルストラーンサーの効果でサイコ・

ウォールドを除外したのか

「そのとおりです。そしてサイコ・ウォールドの効果発動！ ライフを800ポイント払い、サイコ・デビルに2回攻撃を可能にする！」

響弥

LP／2400 1600

「さあ、いきますよ。バトルフェイズに移行します。ヘルストランサーで、岩石の巨兵とバトルフットボーラーを攻撃！ サイコ・ツイスト・ショック！」

「甘いぞ！ トライップ発動《聖なるバリア ミラーフォース》！」

やはつ//ラフオだつたか。前のターンに使われていたらまずかつたな。

「させませんよ。カウンタートライップ《ブローニング・パワー》！ 自分フィールドのサイキック族モンスター1体を生け贋に捧げ発動！ 魔法・トライップカードの発動、モンスターの召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にして破壊する！ サイコ・ウォールドを生け贋に、ミラーフォースの発動を無効にする！」

また消えてゆくウォールドさん。ホントゴメン、つてやめて！

そんな恨めしそうな目で見ないで！

「なに？！」

よし、これで心おきなく攻撃できる。ウォールドさんありがとう。

「いけ、ヘルストラソナー！ 攻撃続行だ！」

「べっぴー。」

「そしてサイコ・デビルで2回連続ダイレクトアタック！ デス・ブレイン・クロウー！」

「ぐおおあああー。」

試験官

L P / 2600 - 2200

「ふふ、素晴らしいデコールだった。結果は後日郵送されるが……君ならまず合格だらうな」

そう言つて手を差し出す試験官。

「あらがとうござります。楽しいデコールでした！」

俺も手を差し出し、試験官と握手をする。互いの健闘を称えるための握手。やっぱり、じつには気持ちいいな。

「それでは、失礼しますね」

「ああ。今日はあらがとう

俺は試験官と別れ、自分が居た席へと戻る。

「お～い、響弥～！」

由梨がデュエルフィールドから走ってきてきた。  
ん？ デュエルフィールドから？

「なあ、お前試験はどうした？」

嫌な予感がしたから一応聞いてみた。すると由梨は

「終わったよ。暴走召喚したエレキリン3体を結束させてダイレクトアタック。3ターン目で終わったよ」

と笑顔で言い放った。

「……相変わらずだな、お前は」

「えへへ。それよりもさ、早く帰る？ 私もつお腹ペニペニだよ～」

そう言つて階段を上がる由梨。

料理をするのは俺なんだがなあ、と、俺は由梨の隣で呟くのだった。

## 自分の魂は大切にすべし（後書き）

響弥「さて、作者よ。いくつか聞きたいことがあるんだが」

「どうかしましたか？ 我らが主人公。

響弥「今回の『デュエル』、俺はラストターンに地の文でもうシンクロはする気は無い、と言つていたな」

「そうですね。確かに言つてますね。」

響弥「にも関わらずサイコ・デビルをシンクロ召喚した。やつていつた俺が言つのもなんだが、あればどうじだ？」

「……すんません。途中からマックス・テレポーターの存在をすっかり忘れてました。」

響弥「……馬鹿めが」

「返す言葉もございません……。」

響弥「で、次話はどうなるんだ？」

「十代や万丈目と絡むのではないでしょ？ うか。」

響弥「そのあたりが妥当だな」

「それでは今回ほ」の辺りで失礼します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7325y/>

---

遊戯王GX 奇跡の軌跡

2011年11月26日22時49分発行